

# 豊後国分寺跡(大分市)

史跡公園として整備されており、大分市歴史資料館(図の左上)が併設されている/軸線は凡そ南北で、図の下から中門跡～金堂跡(現薬師堂)及びその左手前に七重塔跡(現観音堂)～講堂跡～食堂跡と並び、回廊跡・溝跡が残る/中門跡の付近に梵鐘鑄造遺構も残っている/まずは、中門跡から見て行こう!



大分市歴史資料館の豊後国分寺跡史跡公園リーフレットより



この辺りが中門跡

 [video](#)





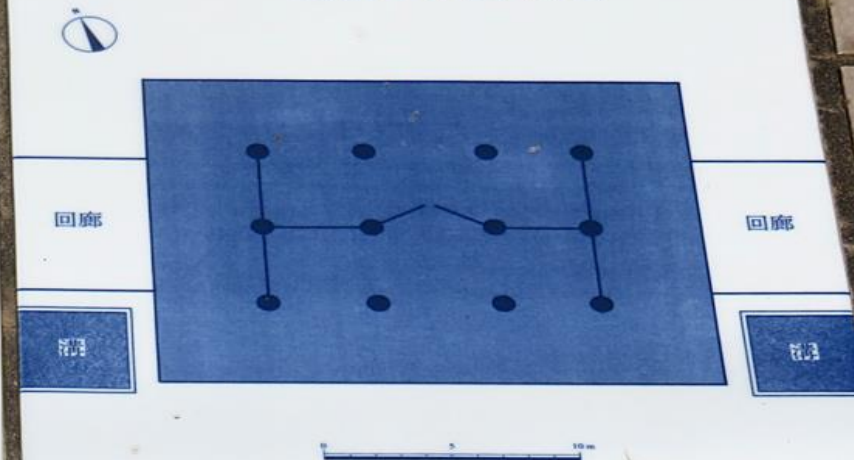
南門の北に造られた門で、回廊によって金堂と結ばれていた

## 中門跡

Ruins of the Inner Gate (Chūmon)

南門の北に造られた門で、回廊によって金堂と結ばれていました。礎石、基壇などはみつかりませんが、回廊に並行する溝が中門の前面まで及んでいないことから基壇の規模が推定できます。基壇は東西14.79m、南北11.84m。この上に正面9.18m（3間）、奥行5.92m（2間）の門が復原できます。

遺構平面図（推定）



中門・回廊・溝跡の調査状況





これが凡その軸線で前方に金堂跡が所在する/北方向を見たところ

 [video](#)





そこで、西方向を見たところ





同じく、南方向を見たところ/この前方に南門があった





同じく、東方向を見たところ





ここは中門跡のすぐ東側に残っている梵鐘鑄造遺稿

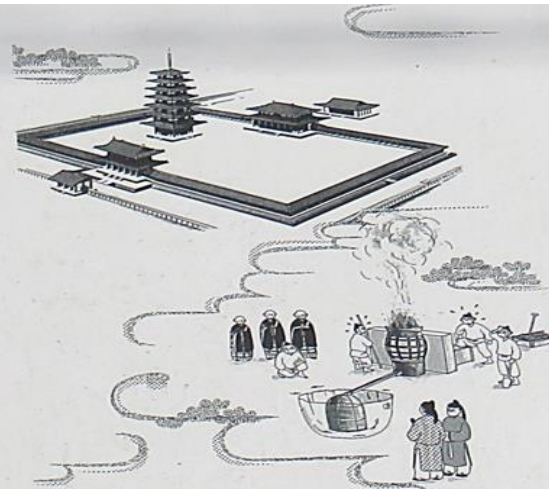




ぼんしょう ちゅうぞう いこう  
**梵鐘鑄造遺構**  
 Hanging bell casting pit

8c末～9c初頭の梵鐘(つりがね)を鑄造した土坑。  
 遺構内には、鑄型や掛木(鑄型を固定する施設)等が  
 良く残されており、銅を溶かした溶解炉の一部も発見  
 されました。

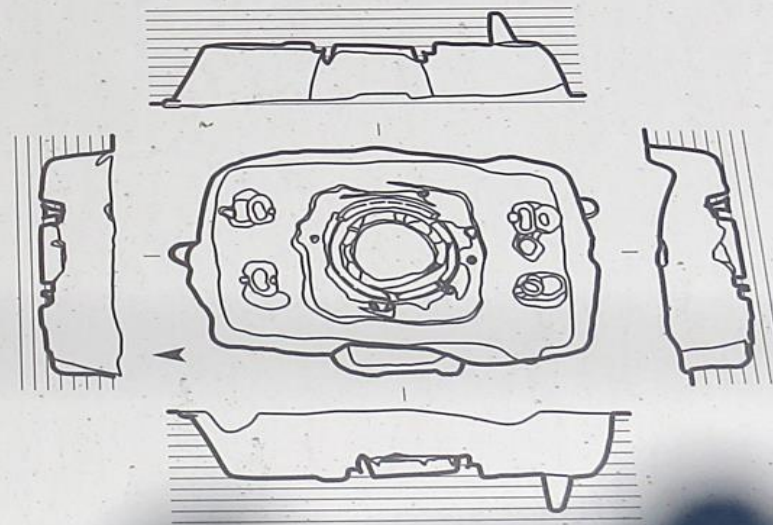
古代は、鑄物師が直接、寺に出向いて鑄造に当る  
 「出吹」と呼ばれる方法がしばしば行われましたが、  
 豊後国分寺もその例と考えられます。



**遺構写真**



**遺構平面・断面図**





ここは現在の薬師堂で、金堂跡とされる





左手に標柱と説明板が立っている

 [video](#)





標柱には「史蹟 豊後国分寺跡」とある





説明板/奈良時代の天平13年(741年)の聖武天皇による発願の後、天平勝宝8年(756年)頃にはほぼ完成していたとされる/伽藍配置は東大寺式とされるが、塔(七重塔)は西側(西塔)のみしか建立されなかったという/七重塔の土壇が残っており、心礎石(出柄式らしい)やその他の礎石の大部分が原位置のまま残っているようだ

# 豊後国分寺跡 大分市大字国分

国分僧寺で医王山金光明寺と呼ぶ。天平十三年(七四一)聖武天皇が一切災障消除年穀豊饒を發願して国毎に金光明四天王護国寺を建て七重塔一基を造り、金光明、最勝王經、法華經、各一部を安置し、封戸五十戸、水田十丁、二十僧をあてられた。寺伝では、同年勅により石川民部某が、豊後国司とともに僧寺、尼寺等を建て、のち行基を開基としたという。天平十三年は天皇御發願の年で、なお未完成的の国が多く、同十六年(七四四)石川年足等を諸国につかわして寺地を檢定し、国郡司を督勵して三年以内に完成するよう命令されたほどであり、十年僧尼寺と見え、續紀天平勝宝八年(七五六)の條に「越後国以下二十六ヶ国(豊後国を含む)国分寺に灌頂幡一、道場幡三九、緋綱二条を下賜され、今日寺地から奈良時代の燈瓦や唐草瓦を出土する」となどから見て、七五六年頃にはほぼ完成していたものであろう。

今日もとの堂塔は廃絶し、金堂跡には後の薬師堂(三間四間)塔跡には觀音堂(三間三面)が建てられていて、金堂跡の上壇はなくなり、十数個の原礎石(造り出しあり)を残すが、薬師堂建設の時原位置を移動したため原形を復原しえないことは遺憾である。しかし塔跡には土壇を存し、中心礎石及び、その他の礎石も大部分原位置を残存する。中心礎石は觀音堂床下にある、東西長径二・一米余、中央部にある。心柱の乗る高さ一四・五、五、直徑七・六、柱の心の位置が不明であるが、ほぼ一・二米四方となるゆえ四間四面であったと思われる。やはり、奈良時代の様式(東大寺式)と解すべきであろう。全国的に見てもこのような巨大な塔はまれで、おそらく続紀記載のとおり、七重塔婆一基とある詔によるもので、奈良時代の伽藍配置では東大寺や薬師寺等の東西西塔に当る訳であるが、それらしい痕跡がないので、本来西塔だけしか建立しなかったと思われる。

国指定史跡昭和八年二月二十八日指定

大分市教育委員会



薬師堂の妻側に回ると、別の説明板があった

 [video](#)





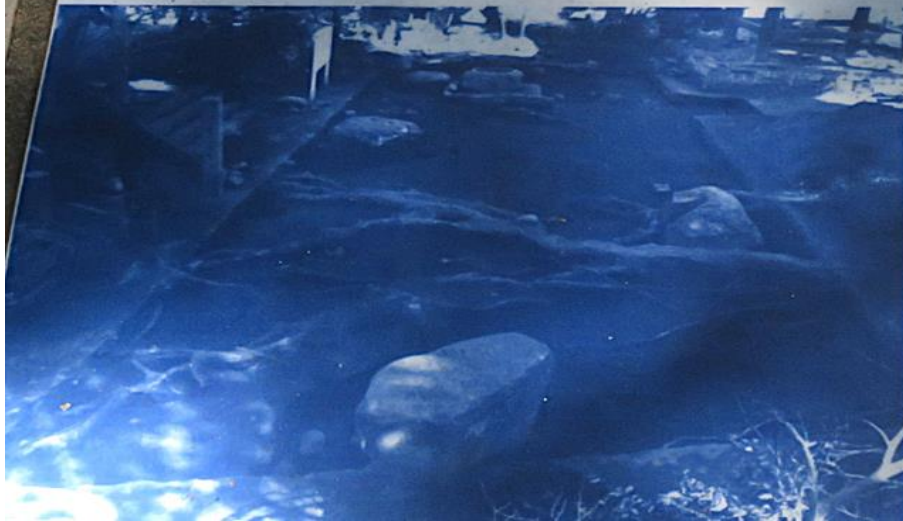
金堂の礎石も残っているようだが、原位置は判らなくなってしまったという

## 金堂跡

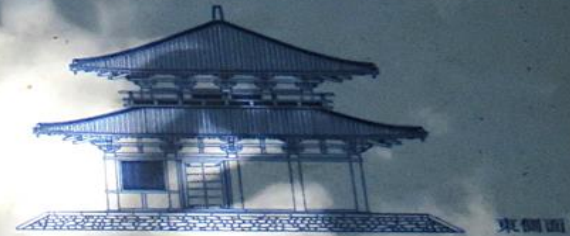
Ruins of the Main Hall (Kondō)

本尊を安置した仏殿で、堂内を金色にすることからついた名前と言います。現在の薬師堂の周りに約40個の礎石が残されていますが、当時の位置のままではありません。基壇の地下部分には現存します。基壇は東西32.6 m、南北21.6 m。この上に正面25.16 m (7間)、奥行14.21 m (4間)、軒の出3.7 mの重層建物がありました。

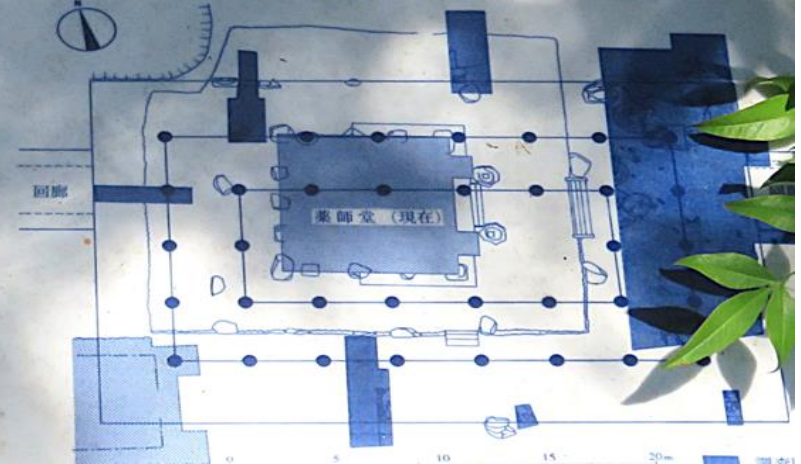
## 金堂礎石の調査状況



## 金堂復原図



## 遺構平面図





ここを右手に少し進むと観音堂があり、そこが七重塔跡のようだ





さて、ここは金堂跡の北側に所在する講堂跡

 [video](#)





そこで、左手を見たところ





同じく、右手を見たところ





説明板/礎石は失われていたが、根石が残っていたようだ

## こう どう あと 講堂跡

Ruins of the Lecture Hall (Kōdō)

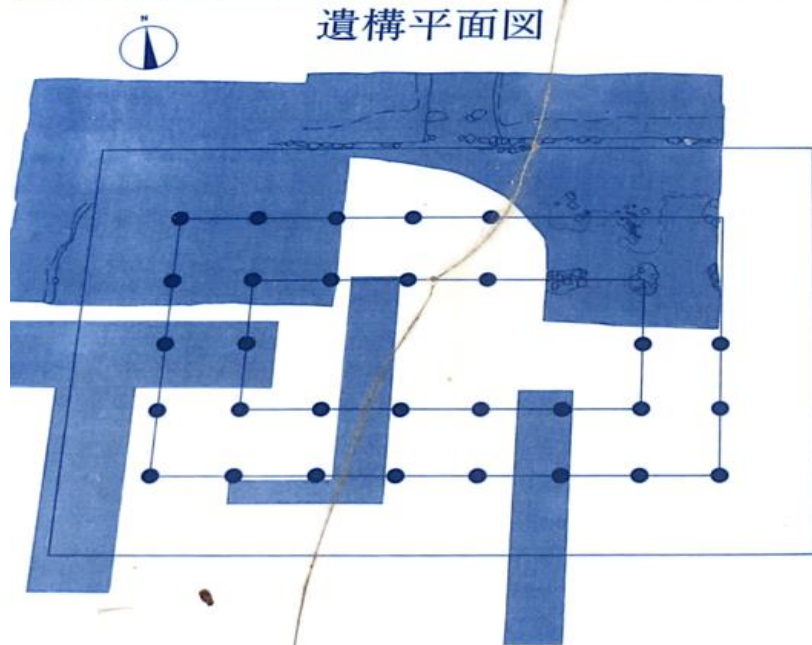
寺内の僧侶が参集して説教・講義・法会などを行う堂。遺構の北半部分に基壇下部が残されています。基壇の規模は東西約27m、南北約18.7mで、瓦積みの外装を施していました。

礎石は失われていましたが、礎石の下に差し込んだ根石が残されており、これから正面20.72m（7間）、奥行11.84m（4間）の建物を復原できます。

## 講堂基壇の調査状況



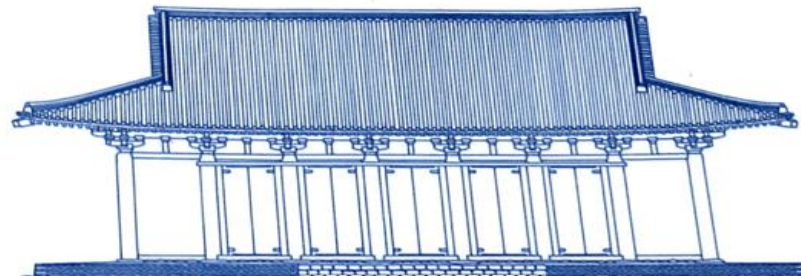
## 遺構平面図



## 講堂復原図



東側面





外周柱と外壁の位置を示す





基壇





中柱の位置を示す









講堂跡から食堂跡方向を見たところ





そこで、左手を見たところ





同じく、右手を見たところ





前方が食堂跡/北方向を見たところ

[video](#)





食堂跡の基壇/説明板がある





そこで、左手を見たところ





同じく、右手を見たところ





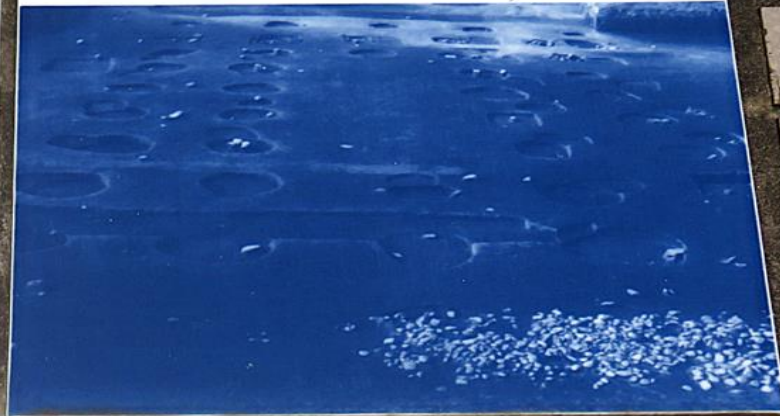
説明板/僧房は無かったようだ

## 食堂跡

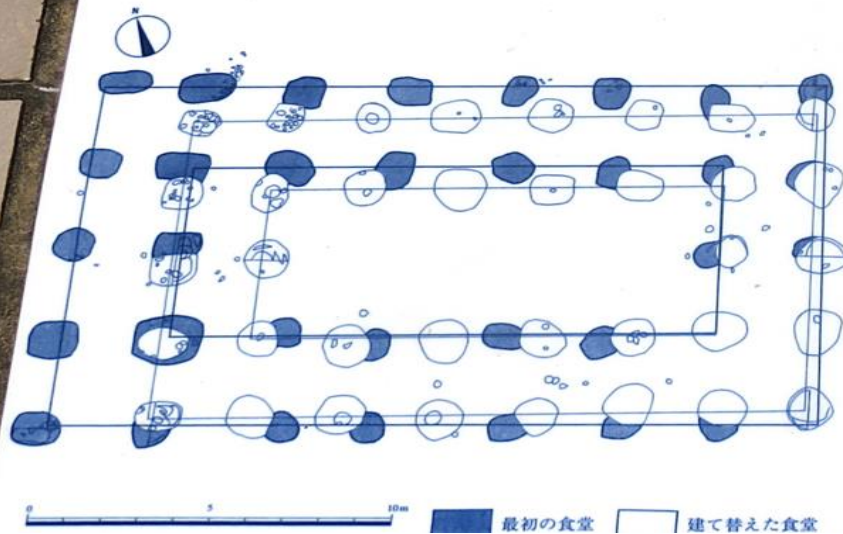
Ruins of the Buddhist monks' Dining Hall (Jikidō)

僧侶が食事をとるところ。諸  
国国分寺では、講堂の北に僧房  
（僧侶の住まい）を造る例が多  
くみられますが、豊後国分寺で  
は遺構の様子から食堂と推定さ  
れます。基壇はなくなっていま  
したが、発見された柱穴から、  
正面21.3m（7間）、奥行12m  
（4間）の掘立柱建物があった  
ことが分かりました。

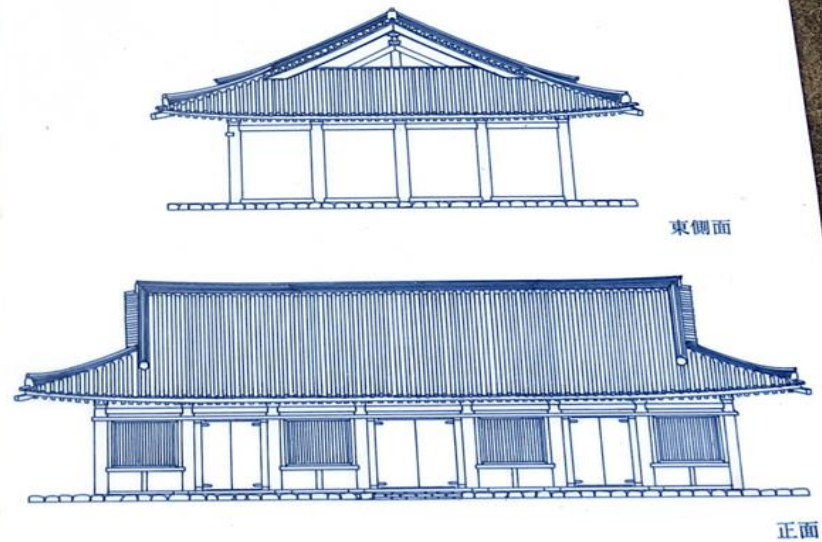
## 食堂跡の調査状況



## 遺構平面図



## 食堂復原図





食堂跡から講堂跡方向を見たところ/南方向を見たところ





そこで、左手を見たところ





同じく、右手を見たところ





さて、大分市歴史資料館を見てみよう





寺院風の造りとなっている





これは歴史資料館の東側から史跡公園内に入ったところにあった説明板

 video

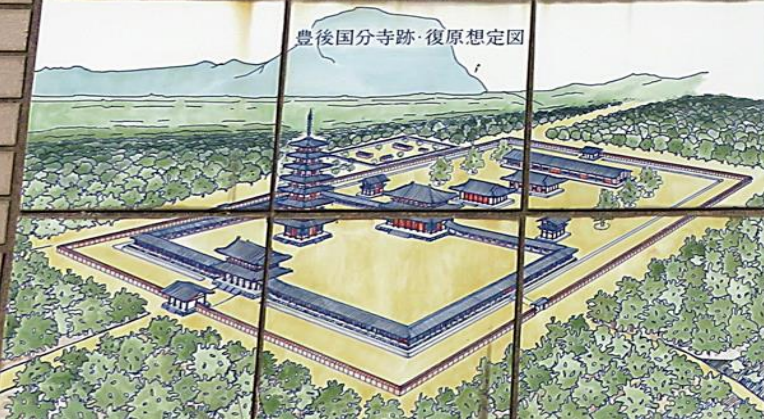
## 豊後国分寺跡史跡公園案内図 Bun-go Kokubunji Historic Park

豊後国分寺は奈良時代の半ば、聖武天皇の命により仏教の力で国を鎮護し災いを除くことを願って、各国毎に建立された国分寺の一つです。豊後国府から余り遠くない大分川左岸のここ国分の地を選び、東西183m南北は300mを超える寺域に七重塔・金堂・講堂・食堂などの壮大な伽藍が営まれました。

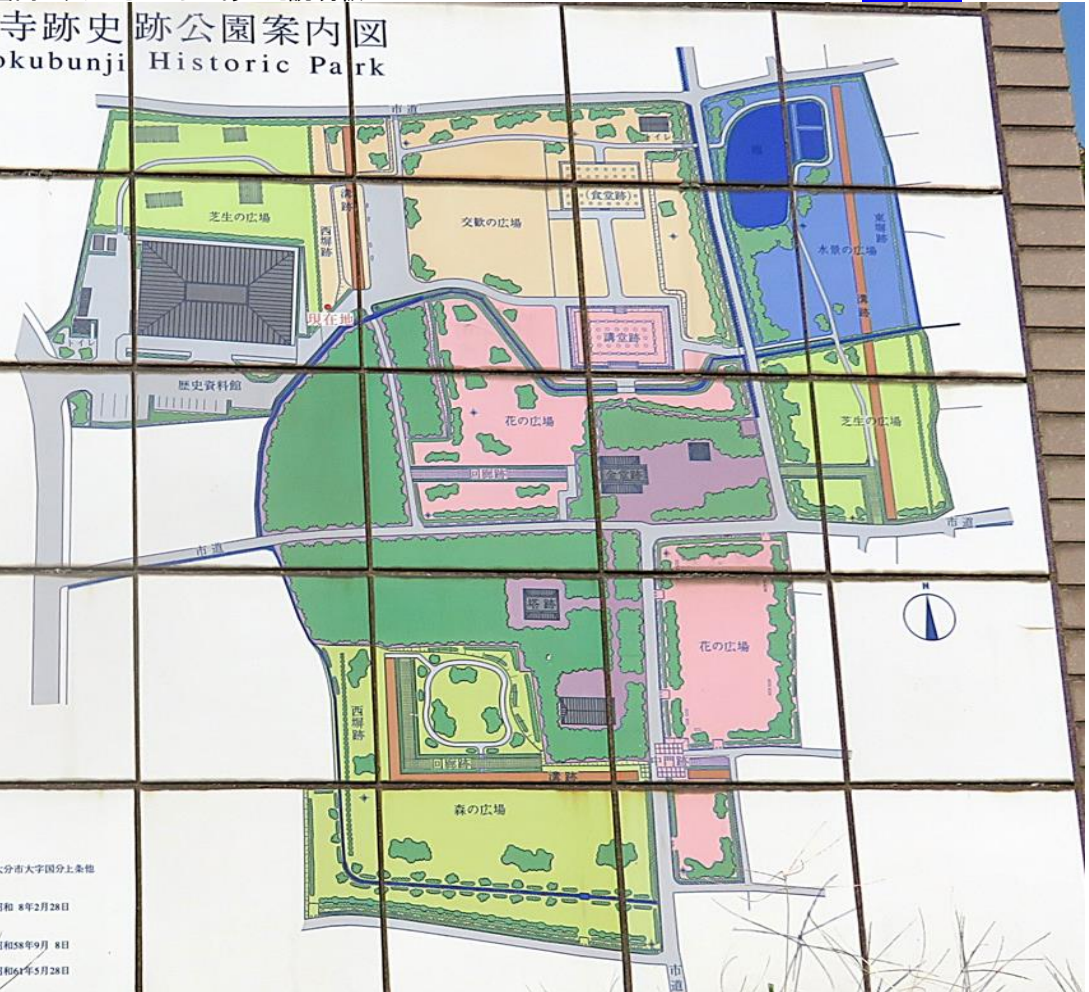
この公園は、往時の豊後国分寺の姿を遺構の復原や表示などで再現し、園内を花・森・交歓・水景・芝生の広場に区分して、散策しながら歴史学習に親める場としたものです。

平成4年3月10日 大分市教育委員会

豊後国分寺跡・復原想定図



- 所在地 大分市大字国分上条地
- 国指定史跡 昭和8年2月28日
- 追加指定 昭和58年9月8日  
昭和61年5月28日





正面前方が食堂跡辺り/左手には溝跡が明示されている









それでは歴史資料館に入ってみよう！

 [video](#)

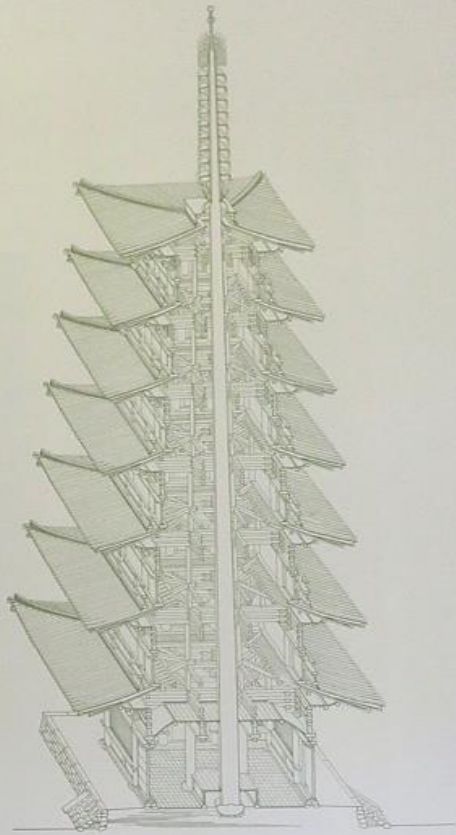




復原された七重塔の十分の一の模型







## 国分寺七重塔の復原

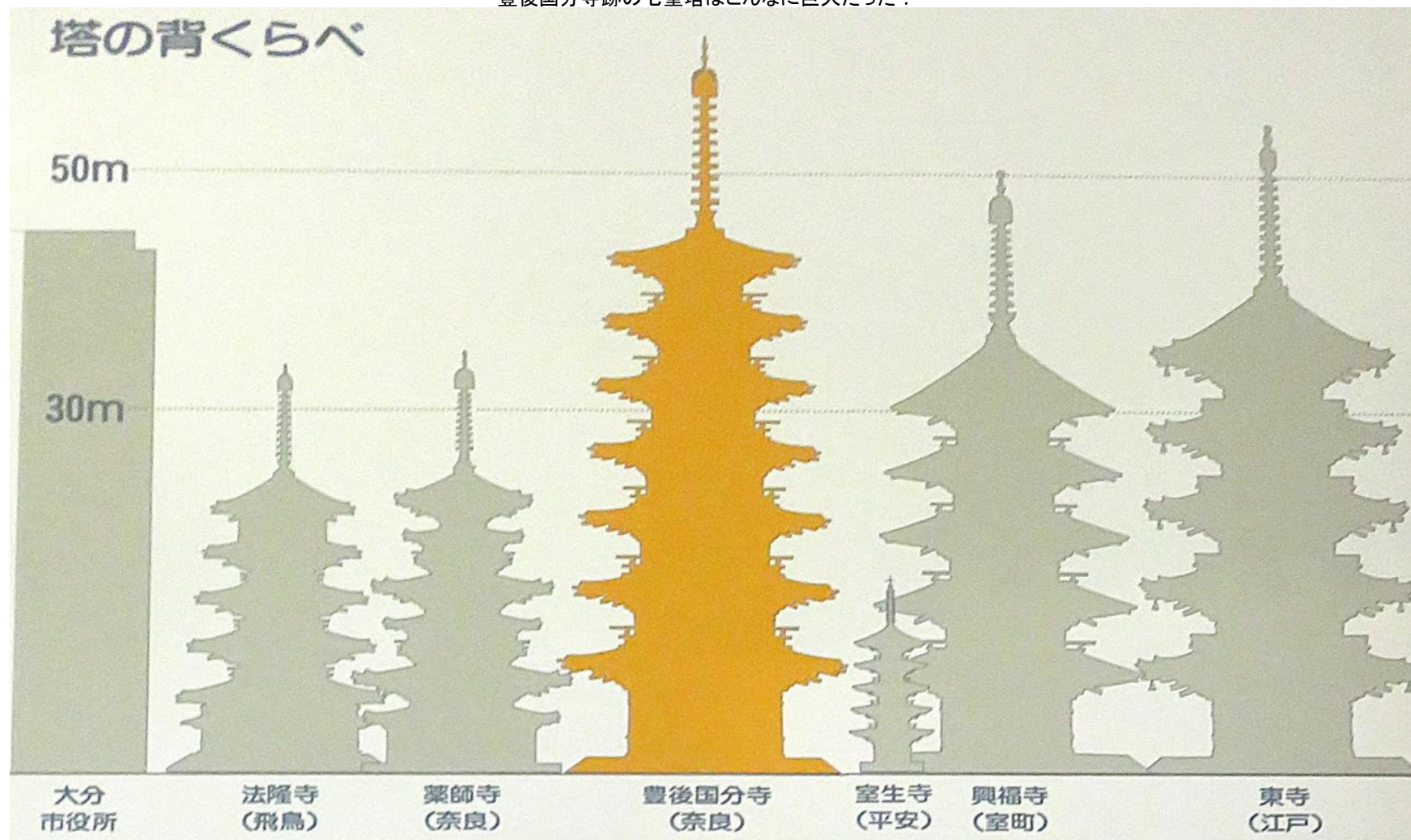
仏教が盛んであった奈良時代の中ごろの741(天平13)年、各国ごとに経典と仏像を祭ることが義務づけられて設けられたのが国分寺である。

豊後国分寺は国分の地に置かれ、平安時代まで栄えたが、中世の戦乱で焼失してしまった。塔跡には柱の礎石がよく残っており、諸国国分寺のなかでもっとも大規模な塔であった。復原にあたって、奈良・東大寺七重塔の高さ(記録による90m)と一辺長(16.3m)との比率から総高67mを求めて、建物各層の高さや屋根、扉、窓、軒下の斗拱などについては現存する奈良時代の塔を参考にして10分の1の大きさに製作した。





豊後国分寺跡の七重塔はこんなに巨大だった！



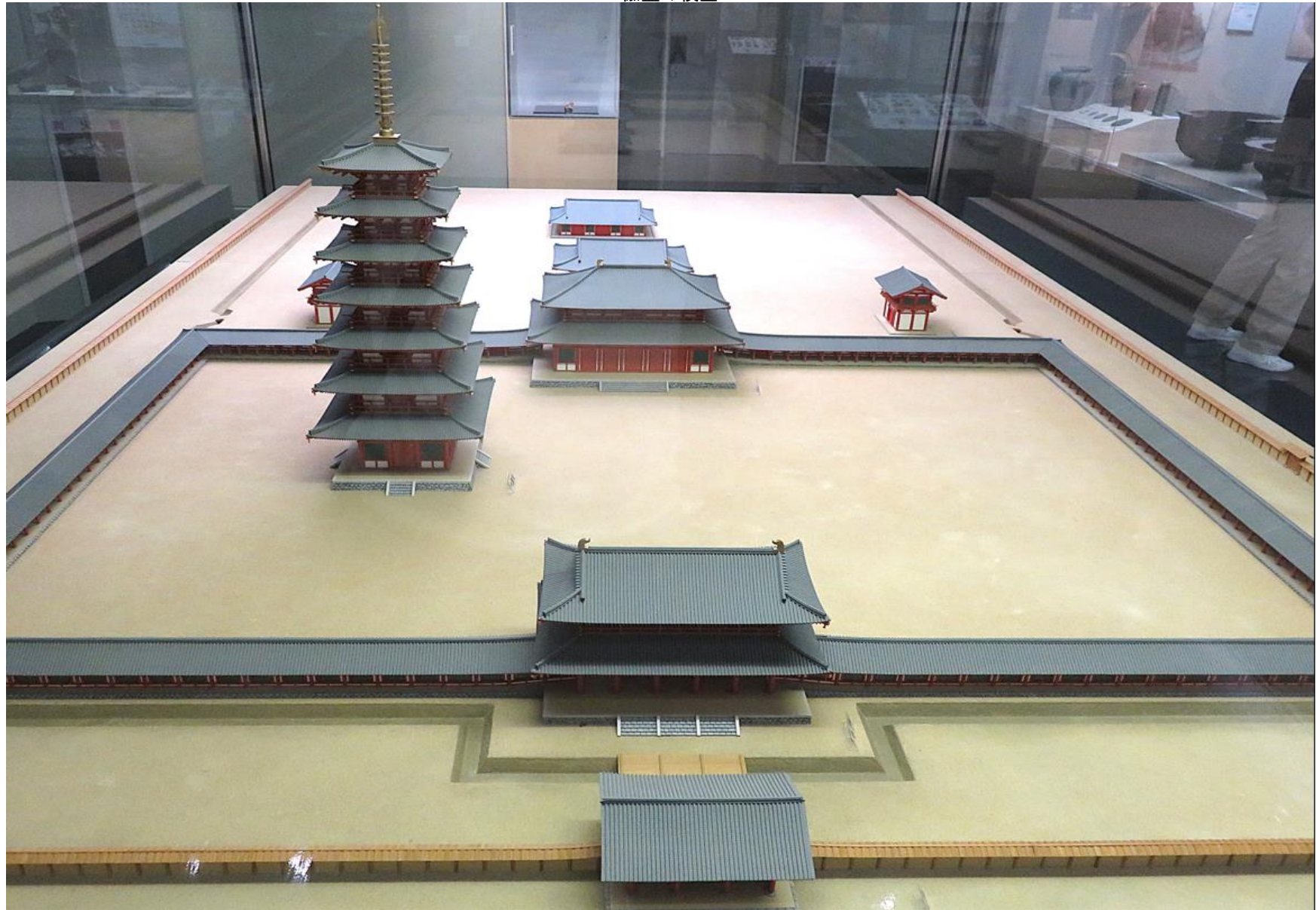


観音堂の写真があった/右手が観音堂で、ここが七重塔跡/左手は金堂跡の薬師堂





伽藍の模型









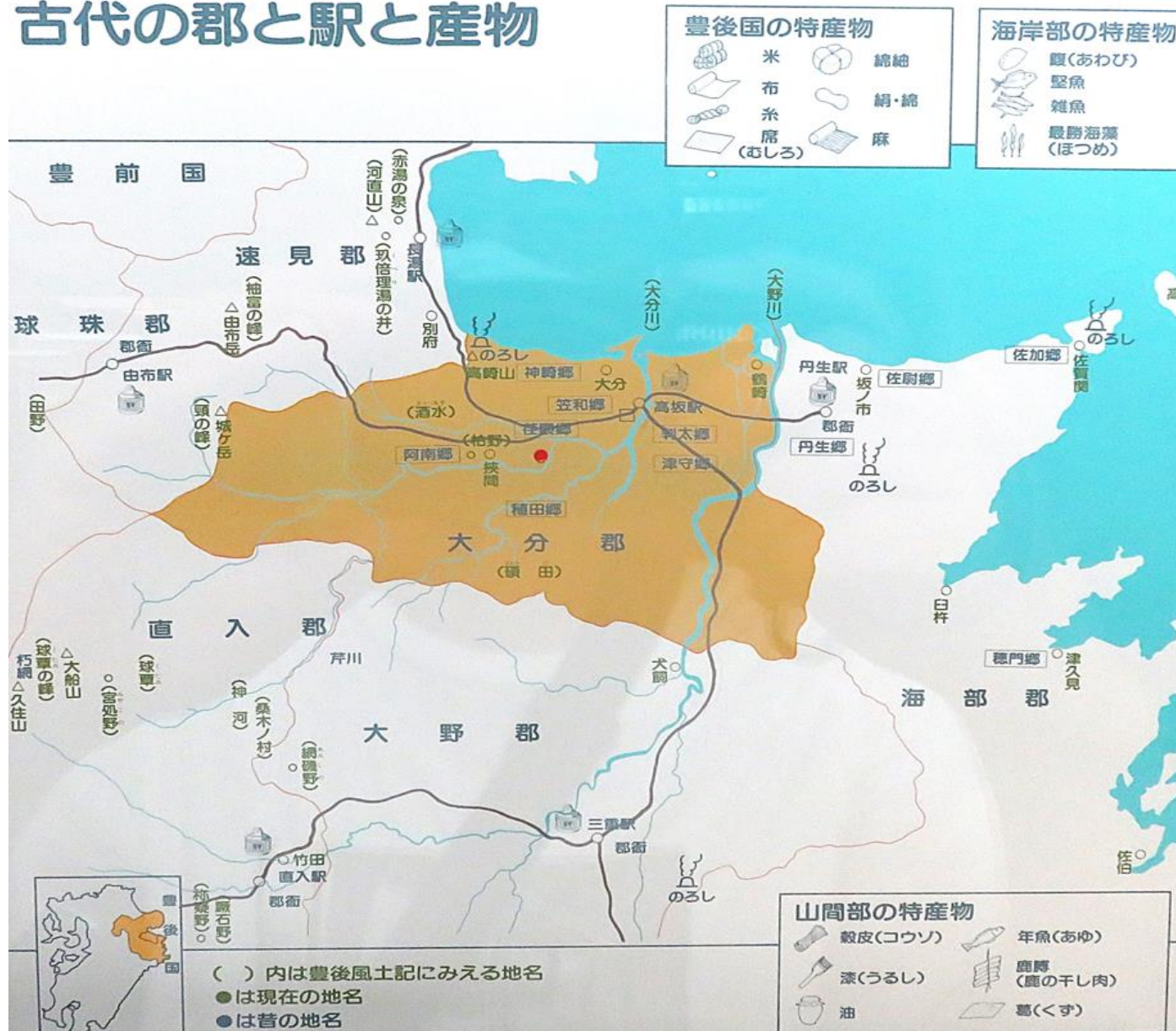
## 豊後国府と郡衙

「豊後国」が文献上初めて確認されるのは698年のこと  
で、国内は8郡（日田・玖珠・直入・大野・海部・大分・速見・国埼）に分けられ、国府（国の役所）は大分郡に置かれていた。国府の具体的な所在地については、大型建物群がみつかった古国府・羽屋の平地一帯と、古代の文献に「高国府」という地名のある上野丘の丘陵地の二つの地域が候補地になっている。現段階では、「国司館」と考えられる9世紀代の築地跡を伴う建物群が確認されている上野台地が有力候補地となっている。

一方、郡衙（郡の役所）の所在地については、円面硯や刀子、石帯が出土している下郡地域が大分郡衙の可能性が高い。海部郡衙については、下郡遺跡群から東に約9km離れた中安遺跡で、郡衙の政庁跡と考えられる遺構が発見されていることから、この地が有力視されている。



# 古代の郡と駅と産物

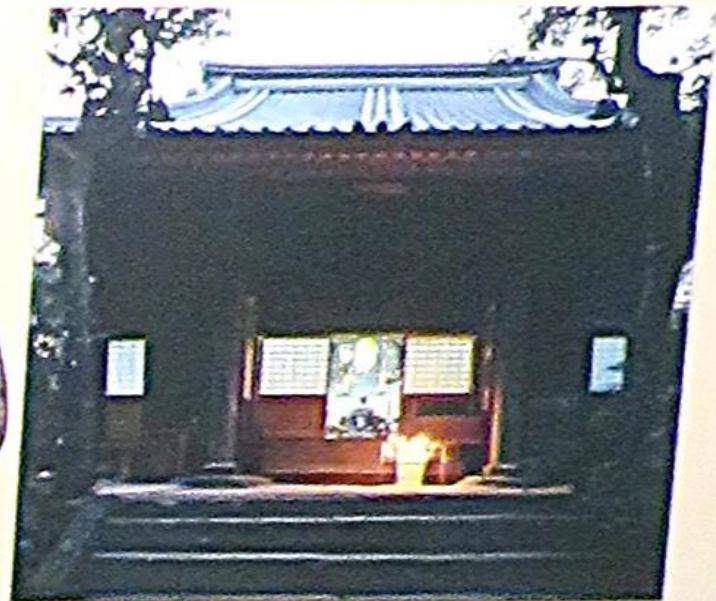




金堂跡の屋根瓦



## 2 豊後の国分寺





屋根瓦に馬の絵が描かれているという





